

△ 翻 訳 △

トマス・ラヴ・ピーコック

『夢魔御殿』

『がむしゃら館』の著者による

(初版 一八一八年)

(第一章―第三章、「作者について」、「作品について」、「主要作品」、「訳者付記」)

霊の暗い角燈がある

それを持つ者にしか使えぬ角燈が

闇の中の幻を照らし

持つ者たちを幻影でさいなむ

彼らにかわり大きな痛みを照らし、

赤 岩 楚 姆 渡

岩 田 輪 辺

託 松 正 美

隆 子 人 行 樹

訳

彼らの悲惨と欠乏とを露にする角燈

——
バトラー

『ヒューディブラス』第一部第一篇 第五〇五―六及び、第三部第三篇 一九―二〇と『人間の愚鈍と不幸について』七―一二及び二二九―三一の合作』

マシユウ

ああ、そりゃ君にとっての唯一立派な気分というものだ。正真正銘の憂鬱なら、全く立派な知恵を君に与えるもんだ。僕だって、時には、憂鬱になることはあるんだぜ。そんな気分の時にはね、すぐにペンと紙を取り出し、十や十二のソネットを一気に溢れ出させるんだよ。

ステイブン

おっしゃるとおりです。おいらもそんなんがたまらなく好きですよ。

マシユウ

じゃあ、君。どうか僕の書斎を使ってくれたまえ。好きなようにしていいから。

ステイブン

それはどうも有り難うござえます、おいらもやりますよ。本当ですとも。ところで、そこには便座、ありますか、腰かけりゃ憂鬱な気分におあつらえむきの。

ベン・ジョンソン 『十人十色』

第三幕第一場〔第七九―九一行〕

それでも拙者は、多くの心優しき詩人たちや雄弁な弁舌家たちの間にあって、うんともすんとも言えない啞野郎と噂されるよりも、金言にある通り、白鳥に伍して鶯鳥もどきにぎゃあぎゃあびいびいと啼きわめく道を選んだしだいだ。

——ラブレ——

『第五之書 パンタグリユエル物語』（渡辺一夫訳 岩波文庫、昭五〇、十八頁より）

第一章

夢魔御殿、半ば崩れかけ、いかにもピクチャレスクと形容するにふさわしい、由緒ある名門の大邸宅、リンカーンシャーのはずれ、海岸線と沼地の細長く延びた土地に、心地好く腰を据えたこのお屋敷は、郷土クリストファー・グロウリー氏〔苦虫氏〕を主に持つという有り難い光栄に浴していた。この人物、生まれつき、腹にいつも憂鬱の虫を抱え、世に「青い悪魔〔振戦譫妄症〕」と呼ばれる妄想性の消化不良にひどく悩まされていた。若い頃、友には裏切られ、恋には破れた挙句、つい腹立ち紛れから、とある婦人に求婚したところ、この婦人、クリストファーの財に目が眩み、これをあっさりと受け入れた。しかしこの婦人、とかくするうちに、試練を経た若き情愛の絆を、なんとずたずたに引き裂いてしまう。婦人の虚栄の方は、生氣に溢れているとは言えぬまでも、いとも豪華な邸宅の女主人におさまることで、十分に満たされはした。しかし愛の泉の方とは言えば、すべてこれ凍りついて、今はひんやりとした水晶も同然。確かに富は手に入れた。が、富をいわば富ますもの、愛情の入り込む余地など、奥方の心のどこを探してみても見当たらなかったのだ。富が買い与えることのできたものすべては、奥方にとって、どうでもよいものと

なった。というのも、この奥方は、富の買ひ与えることのできぬもの、富よりはるかに価値のあるものを、ただ富ゆえに放棄してしまったのだから。目的と手段を取り違えたこと——富は賢明に用いれば幸福をもたらす手立てともなろうが、それ自体は幸福には非ず——ということに気付いたのは、すでに手遅れになってからのこと。愛情を身勝手にも枯れ果てさせた今となってやっと、すでに富が手段としてさえ役に立たぬことに気付いたのだ。富こそ、奥方が、そのために自分の愛情のすべてを生贄として殺した目的、今や奥方に残された唯一の目的であったのだ。もちろん、奥方自身、このことを行動原理と自認していたわけではなく、むしろ、奥方が半ば無意識に自分を騙し騙しするうちに、その行動に影響し、気がついてみると根の深い強欲な性格の持ち主が出来上がっていたというわけだ。心の内なる乱れの責めをすべて外に負わせているうちに、この奥方、やがて正真正銘の口やかましい、がみがみ女となり果てた。日課にしている人気のない部屋の見回りに奥方が及ぶと、屋敷中の生きとし生けるものが、そのきしる靴の音にさえ、サツとばかりに身を隠す。その声を聞けばなおさらのこと、自然のいかなる事物もその声に譬えようがない。というのも、およそ女性の声なるものは、優しさと愛とに調律を施されれば、他のあらゆる音と調和を保ちつつ、それらの中でひとときわ際立つが、その声が、怒りと苛立ちで自然にもとる金切り声へと引き延ばされれば、他のいっさいの音と不和となって折り合わず、それだけが聞く者の耳を突き刺すから。

グロウリー氏はよく、わしの屋敷はだっ広い犬小屋も同然、住んでおるものは犬のような惨めな生活を送っているのだから、と嘆いたものだ。愛と友情の双方に失望し、人間の学識など虚栄に過ぎぬ、とみたグロウリー氏は、かくして、もしこの世に楽しみと呼べるものがあるとすれば、それはただ一つ、すなわち豪華な晩餐のみ、という結論に達した。この楽しみに夫が耽るのを、しみったれの奥方がよく見過ごすはずもなかったが、運命の悪戯か、とある明け方、『クリスタベル』のリオライン卿のように、「彼目覚め、奥方の死せるを見い出せしなり」(コールリッジ、

第二部、第四行」。後^{あと}には、やっとのことで平安の日々を取り戻した男やもめと、まだ年端もいかぬ子供が取り残される。

グロウリー氏は、この掌中の玉の跡取り息子に洗礼を施し、母方の先祖に因み、スカイスロップ「物悲しい、陰気な顔色の者」と命名。この名前、ある雨降りの日、「生来の倦怠〔自殺性厭世の病〕」の発作に襲われ、自らの首をくくり、検視陪審より、「自らに罪科を処する者」という、どうとでも解釈できる頌徳の言葉を頂戴した親類筋の男の名だ。こういうわけで、グロウリー氏は故人の思い出に敬意を表して、故スカイスロップ氏の頭蓋骨でパンチボールをしつらえた。

スカイスロップはやがて成長し、郷土の家の師弟の常として、パブリックスクールにやられ、ほんの僅かの学問を叩き込まれた挙句、今度は大学で、それを注意深く取り除かれた。スカイスロップは、詰まるところ、十分に脱穀された穀物の穂さながらに空っぽの頭で、つまり彼の学寮の恩師と仲間を唸らせるほどの教育を修了し、家に帰されたのだ。回りの者たちは、この篤学の士に、賞賛の証として、英語化されたラテン語という、半野蛮な言語で書かれた賛辞の銘刻の冒頭に彼の名の彫り込んだ銀製の魚用ナイフを贈呈したのである。

とは言っても、馬を縦列に、また出鱈目に繋いでも完璧に走らせる、しかも旅籠の目効きともきていた御学友たちは、大学を「去るまでに、大酒を飲むことを教え込んで『ハムレット』第一幕第二場 第一七五行」いた。スカイスロップは撰りすぐりの火酒を飲んで、真夜中のランプの恍々たる光が、次々と積み重なる空瓶に照らし出されるのを見て多くの時間を過ごしたのである。休暇には夢魔御殿に滞在することもある。また、時には、ロンドンの伯父の屋敷で過ごすこともあった。この伯父ヒラリー「陽気者」氏、すこぶる陽気な屈託のない紳士だが、縁は異なるもの、憂鬱なグロウリー氏の妹君と結婚したのである。ヒラリー邸の常連客は、底抜けの陽気な者ばかり。スカイスロップ

は御夫人方とダンスを楽しみ、紳士方と酒席を共にし、その覚えめでたく、双方からいとも洗練された魅力溢るる人物、大学の誉れと称されるにいたった。

ヒラリー氏の邸宅で、スカイスロップは初めて、美しきエミリー・ジルエット〔風見鶏〕譲にまみえ、一目で恋に落ちた。何も目新しい話ではない。彼の意は好意をもって受け入れられた。おかしな話ではない。両家の父親、グロウリー氏とジルエット氏は、この期に及んで縁組の話し合いを持ち、持参金問題で折り合わず、口論の結果破談となる。これまた目新しい話でもおかしな話でもない。変人たちは引き裂かれ、涙ながらに永遠の愛を誓い合ったことだった。しかるにこの悲劇的出来事の三週間後、この令嬢、ラックウィット〔脳なし〕閣下により、祭壇に導かれ、満面に微笑をたたえた花嫁となったのである。これまたおかしな話でも目新しい話でもない、よくあること。

スカイスロップは夢魔御殿でこの報を聞き、その時は、半狂乱の体。彼にとっては初めての失恋で、敏感な心を奥深く、苦しめられたのである。父親はと言えば、息子可愛さで、慰めてやろうと、『傳道之書』の私家注釈本の御進講におよぶ。その注釈本、彼自らの作文になるもので、「都て空なり〔第一章第二節〕」ということをも明々白々に力説していた。父親は次の一節を、ことのほか強調する。「我千人の中には一箇の男子を得たれども、その數の中には一箇の女子をも得ざるなり〔第七章第二八節〕」

「どうしてソロモンにそれが期待できるというものでしょう。どだい無理な話です。」スカイスロップは反論を試みる。「千人がすべてが後宮に閉じ込められていたのですよ『クイーン・マブ』第八篇へのシェリー自注」。ソロモンの経験など我々の生きているような自由な社会の先例とはなりませんよ」

「閉じ込められていようが、自由であろうが」グロウリー氏は言った。「結果は同じことだ。おなごの心というものは、いつだって閉ざされているんじゃないからな。その鍵は虚栄心と欲得だけだ。わしはしみじみ実感を言っとるまで

じゃよ。スカイスロップ」

「それは残念です、父上」とスカイスロップ。「ですけども、どうして御婦人方の心は閉ざされてしまったのでしょうか。問題はあの不自然な教育にあるのではございませんか。御婦人方を単なるオルゴール人形に丹念に仕立て上げ、社交界というあの大きな玩具屋に陳列して売りに出そうというあの教育に」

「なるほど」とグロウリー氏。「確かに、おなごの教育などお前の受けた教育に比べれば愚にもつかない。それにしてもオルゴール人形とはうまく言ったものじゃ。わし自身、昔、ひとつ買ったが、恐ろしく調子はずれじゃった。しかし、原因が何であれ、スカイスロップ、結果ははっきりしとる。結婚前には、見抜こうとしても、ええようにしか見えんのじゃ。結婚して初めて、おなごは本性を現しおる。わしの苦い経験からようわかつとる。結婚はだな、まあ、籤引みたいなものじゃ。籤はよったりせん方がいい、撰り好みが少ないほどいいんじゃ。幸運の番号を一発、当てこむつもりで相当の金や手間をかけたところで、空籤だとわかつてみる、一筋縄じゃいかん複雑な失望をこうむることになる。空籤を引いたことの無念さに加えて、手間のかけ損、金のかけ損じゃからな。空籤を引くこと、それだけでも出鱈目に籤を選んだ者にも十分、悲嘆のもとじゃが、はずれたところで、苦勞のない分、まだ耐えられるわ」このありがたい道理のお言葉も、スカイスロップにとっては、馬の耳に念仏。相も変わらずやるせなく、意気消沈したままに、彼の塔に退き下がってしまった。

スカイスロップの住んでいた塔は、屋敷の南東の角に立っていた。その南側、塔の基底部分は、テラスに面し、そこにはツタとわずかばかりの水陸両性の植物以外、何も生えていないにもかかわらず「庭」と呼ばれていた。荒れ放題の、梟が沢山生息する南西の塔は、同じ命名法に従えば、「鳥類飼育場」とでも呼べただろう。このテラス、あるいは庭、さもなくばテラス付庭、はたまた庭付テラス（読者のお好なように命名してもらいたい）から開けた海が斜め

に見え、細長い平らな海岸の一画と、沼地の一画と、沼地の風車の、それは素晴らしく単調な景色とに面していた。

こうした描写から、読者はこの建物が、ある種の城郭風の僧院だと思われるかもしれない。また、この建物、果たして昔の教会活動家の要塞のひとつだったかどうか、恐らく詮索してみたく思うだろう。実際、そのとおりなのか、あるいは、もともとの趣から形を変えてしまったのか、どの程度までグロウリー氏の先祖の趣味によるものなのか、残念ながら、我々の知るところではない。

東北の塔には、グロウリー氏の部屋があった。塔に沿って巡らされた堀と、その向こうの沼地が見晴しのすべてである。堀は屋敷を取り囲み、南を除くすべての方角の壁と接していた。

東北の塔は使用人に当てられていたが、グロウリー氏は使用人の選択には、いつも二つの基準のいずれかに照らして選んでいた——浮かぬ顔か陰気な名前かである。使用人頭の名はレイバン〔大鳥〕、家令の名はクロウ〔鳥〕、従僕の名はスケレット〔スケルトン(骸骨)〕であった。グロウリー氏の主張によれば、この従僕、フランスの血筋であるからして、スケレットというのが正しいらしい。馬丁の名はマックス〔つるはし〕とグレイブス〔墓場〕といった。ある時、下男が必要となり、ディゴリー・デスヘッド〔死顔〕と署名する人物から手紙を受け取ったので、グロウリー氏、時を移さず、この人物に決めた。ところがディゴリー、来てみるや、その名の示すとは大違い、顔は丸い赤ら顔、目は笑っているようで、グロウリー氏は、思わずぞっとした。デスヘッドは、いつもニヤニヤしていた。身の毛のよだつあの笑いではなく、喜劇の仮面のニヤニヤ笑いだ。終には、淫らな笑いを響かせて、広間の静けさを掻き乱した、ということだ。グロウリー氏は解雇を申し渡すことになった。しかしながら、このディゴリー、すでにその頃までには下働きの女たち全員をたらし込む程に長く、屋敷に勤めていた。その彼の去った後には、賑やかな若いデスヘッド二世たちの群体が、かつては夢魔御殿の唯一つの聖歌隊であった、梟たちの合唱に加わることに

なつたのである。

屋敷の本体はと言うと、大広間、宴会用の広々とした部屋、そしてきわめてまれにやって来る訪問客用のおびただしい数の寝室に分けられていた。

家の利害が絡んで、グロウリー氏は、時折、同じ思惑で訪ねてくるヒラリー氏夫妻の訪問を受けねばならなかった。この元氣旺盛な紳士、そういった折、その溢れんばかりの陽気さを吐き出す伝導体ともいふべき相手を見つけられずに、その結果、二倍に蓄電したライデン瓶のようになって、挙句の果ては、しばしば言語同断の馬鹿騒ぎとなって爆発し、グロウリー氏の神経をこれでもかとかばかりに騒ぎ乱したのであった。

もう一人の時折の訪問者、グロウリー氏の趣味に大いに適った御仁は、フロスキー〔闇を愛する者、闇の使徒〕氏なる人物で、誠に涙もろい憂鬱なる紳士、文壇ではいささかの名声を博していたが、自分ではそれ以上だと思っていた。氏をグロウリー氏に大いに推すところとなったその性質とは、薄気味悪いものと、涙を誘うものに対する、洗練された感覚である。氏ほどに惨めさを味付けにして、詳細に不気味な話を語れる者はいないだろう。また氏ほどに薄気味悪さという枝葉末節を交えて、頭蓋骨と大腿骨二本を十字に交差した組み合わせた死を連想させるような怪奇な話と呼び出すことのできる者はいないであろう。何事によらず、神秘のベールに包むことが氏の真髓であった。氏は、「かくして無きものを除けば、在るはただ無きもののみ。『マクベス』第一幕第三場 第一四一行」というあの幻想の世界の只中に生きていた。氏は、はっきり目を見開いていながら夢見る人で、真つ昼間に、幽霊たちが、自分のまわりで踊るさまを見る。若い頃は、自由を求める情熱家で、フランス大革命の始まりを、戦争、奴隷制度、はたまたあらゆる種類の悪徳や不幸が、地上から駆逐される日の到来を約束するものとして、歓呼の声をもって迎えた。しかしこれらすべてのことは実現されず、氏は何もなされなかったものと推論し、この推論より、その論理体系に従って、

何もなされなかったよりも一層の悪がなされたのだ、という結論を導き出した。すなわち、専制政治及び迷信という封建時代の要塞の打倒こそ、有史以来、人類に降りかかった災禍のなかで最大のものだ。今や人類に残された唯一の希望は、瓦礫を騒ぎ集め、最初に光が差し込んでいた銃眼のない要塞を再建することである、と。このあっぱれな偉業において一助を担う者となるべく、自らを訓練するため、氏はカント流の形而上学の暗闇の真っ只中に飛び込み、常識のもたらず通常の日の光に耐えられなくなるまで、先験的な闇の中に、数年間、身を沈めたのである。氏は太陽を「鬼火」と呼び、その「古き哲学」の薄暗い棲家の中で、人を惑わせる光から身を避けるため、氏の愛想の良い声に耳を倒ける者には誰にでも訓戒を与えた。その数は「英国王リチャード万歳！『リチャード三世』第三幕第七場第二行」と叫んだ人々と同じくらい数少ないものであった。この「古い」という言葉は、氏にとっては堪らない魅力。氏は、いつも「古き良き時代」という言葉を口にしていたが、その意味するところは、物騒な神学が全盛の時代、ライバル同士の聖職者が、ヘラクレソスのような力強い鳴り物入りで、「聖職者の太鼓（バトラー、『ヒューディブラス』第一部 第一篇 第十一）」、説教壇を叩きながらを自分たちの教えを宣伝し、後には、一方の聖職者が、他方の聖職者を、火あぶりの刑に処すべし、という誠にもってごもつともな結論で、その一連の三段論法を締めくくった時代なのである。

しかし、グロウリー氏の最愛の友人、またこの上なく歓迎された客は、マニ教的二元論の千年至福説信奉者、ツーバッド（お気の毒）氏であった。『ヨハネ黙示録』の第十二章第十二節の聖書の言葉が氏の口癖。「地と海とは禍害なるかな。悪魔おのが時の暫時なるを知り、大なる憤志を懷きて汝等のもとに下りたればなり。」氏はこの世の絶対主権は、賢明なる神慮により、しばしの間、大魔王に渡されているが、まさにこの時代において、俗に開けた時代と言われている今の時代に、その力が頂点に達するのだ、と主張していた。氏はこうも付け加えた。やがて大魔王は、天

より投げ落とされ、至福の状態がそれに続くのだ。しかし、いつも次の言葉を付け加えるのを忘れない。「だが、我々の生きている間のことではないけれども」この最後の言葉は、いつも気心の知れたグロウリー氏の憂いに沈んだ返事に木霊されたのである。

もう一人の常連客は、十マイルばかり離れた村、クレイダイクの教区牧師、ラリンクス〔喉頭〕師であった。師は、善良な、面倒見のいい聖職者、有り難いことに、いつも心よく、苦境に陥った田舎紳士の誰とでも、話相手になってやり、その家で一宿一飯に預かった。師にとって、困ることは一切ない——ビリヤードでも、チェスでも、双六でも、ピケットでも、あるいは差し向かいでのセブン・アップでも——はたまた二人以上でするトランプ、組にならずとも、二組でも、また、三組に分かれてであろうと、何でもござれであった。御婦人が、踊り相手がなくて壁の花となっているのを見ているくらいなら、たとえ彼女が三十の坂を越していようと、相手をつとめ、友人に交じって踊りさえもした。午前中は、乗馬、散歩、帆走に出かけ、——正餐の後には歌を、夕食後には幽霊物語を——郷士とはポートワインを、夫人とは一杯の緑茶を——それら全部、あるいはそのどれでも、はたまた他の誰であろうと、その人の好みに合いさえすれば他の何であろうと、その上衣の染料〔白〕にふさわしく、ラリンクス牧師、いつ何時であろうと、何でもかんでもお上手だった。夢魔御殿に滞在中は、グロウリー氏を慰め——スカイスロップとマディラワインを飲み——ヒラリー氏とは共に冗談を飛ばし——ヒラリー夫人はと言えば、ピアノまで手をとってやり、扇子と手袋を預かると、驚くほど手際も鮮やかに楽譜をめくる——ツィバッド氏とは共に『ヨハネ黙示録』を引用し——また観念的なフロスキー氏とは共に封建時代の闇黒の古き良き時代を哀悼したのである。

第二章

スカイスロップのエミリー・ジュールット譲への恋情が手痛い結末を迎えてほどなく、グロウリー氏は、心ならずも、訴訟に巻き込まれていることを知り、大法官院の高等法院に赴いて、その御機嫌を取らねばならない羽目となった。スカイスロップは夢魔御殿にひとり残されることになる。彼はやけどをした子も同然、女性の火と燃える眼のきらめきを恐れたのである。（諺）やけどした子は火を恐れる（一度痛い目にあうと慎重になる）。彼は「その認知能力を、沈黙考を熟考させることに没頭させ（ヘンリー・ケアリー、『クロノホンソンソログス』（一七三四）序幕）、広大な屋敷のまわりや庭のテラスを漫步した。テラスは南西の塔のところで行き止まりになっている。そこは、例の、荒れ放題の、梟が群生しているところ。夕方になると、スカイスロップは、ここの苔むした石の残骸の上に腰を下ろす。崩れた壁に背をもたせ、――頭上には、梟の棲家となっているツタを天蓋とし――『若きウェルテルの悩み』を手にとって。大学に行く前は、ロマンチックな読み物に、多少の趣味を持ち合わせてはいたものの、そこで、大学の名誉のためにあえて白状せねばならないが、どんな種類のものであれ、読書と名のつくものに対する愛情を矯正し除去してもらったのだ。その矯正は失恋とまったき孤独が相重なり、再発を引き起こすことさえなかったなら、さぞ完璧なものになっていたであろうに。彼はロマンスやドイツ悲劇を貪り読み始めた。フロスキ―氏のお薦めで、先験的哲学のどっしりとした大著に夢中になり、神秘思想の専門用語集や黒魔術図像解釈集と首っぴきで、研究をすることさえ厭わないようになったのだ。夢魔御殿での性に合った孤独の中、形而上的のロマンとロマンス的の形而上学で異常をきたした観念は、十分な時間と空間を肥料として芽生え、成育し、頭はライオン、胴は山羊、尾は蛇で火を吐く怪物キマイラの如き、とめどもない妄想の豊かな実を結び、さらに芽を吹き成長し、おびただしく生い茂る群生となった。

今や彼は「世界を変革するための情熱（『フォーサイス、『道徳学原理』」に悩まされることになった。多くの空中楼阁を築き、そこに秘密裁判所の連中や、哲人たちの秘密結社の一団を住まわせた。彼らは、いつもきまって、スカイスクロップの計画した人類の再生という青写真の中で、想像上の手先となったのだ。彼は完全な共和国を創立するつもりだったので、自分自身にこれら自由の神秘的使徒に対する絶対主権を賦与した。また『恐るべき神秘』（C・F・A・グロス、『独創的精神』のP・ウィルの翻訳（二七九頁））を枕の下に置いて眠り、尊い盟主たちや不気味な陰謀者たちが、地下の洞窟で深夜の会議を開いているのを夢見たりもした。午前中を、書斎でナイトキャップをかぶり、ゆっくり大股に歩きながら、陰気な瞑想に耽って過ごしたのだが、そのナイトキャップを修道士の頭巾のようにまぶかにかぶり、しかも縞のキャラコの部屋着を陰謀者のマントのように巻き付けていた。

彼は独語した。「行動は、意見の帰着である（ウィリアム・ゴドウィン、『政治的正義』第五章の主題）。新型の意見に働きかければ、新型の社会に働きかけることになるだろう。知識は力だ。知識が少数者の手中にあり、その少数者は、勢力拡大や横領という己の利己的な目的のため、多数者を惑わすのに用いている。知識が、多数を導くため、それを用いる少数の手中にあるとしたらどうだろう。もし知識が万人のものであり、大衆が啓蒙されたならどうだろう。いやいや。多数はいつも指導されねばならない。しかし彼らには賢明で誠実な指導者を与えよ。考える者は少数で、行動する者は多数。それこそが完全な社会の唯一つの基盤だ。かくの如く古代の哲学者も考えた。彼らは密教的であると同時に、部外者にもわかりやすい教義を持っていた。あの崇高なるカントも然りだ。彼は、奥義を授けられた者にしか理解出来ない言葉で、その託宣を説いているのだ。それが、あの盟主たちの秘密結社の考えだった。その考えは、迷信と専制政治の恐ろしい側面であり、蜜蜂がサンザシやイラクサの花から蜜を集めるように、社会という広大な荒野から知恵と天才を集めながら、人類の卓越性を鎖で縛りあげるように固く結びつけ、もし時到来せずして打ち破

られることがなかったならば、世論を率いて世界を再生していたはずなのに」

スカイスロップは再生者たちの結社復活の実行可能性に思い巡らせ始めた。自分の考えをはっきりさせ、また時代の脈打つ知恵を、精神の鼓動を感じとろうと、彼は論文をしたため、世に問うてみたのである。この論文、その意味するところは、観念的専門用語という修道士の頭巾により用意周到に覆い隠されてはいたものの、深遠かつ危険な問題をほのめかすくどりに満ちていた。彼は、それが国中に沸き返るような大騒ぎを引き起こすものと考え、導火線に火をつけて大岩の爆発を待つ坑夫さながらに、恭しく期待に身を震わせつつ、その結果を待ち望んだ。しかし何も聞こえてこない。というのもその爆発、その後で何か続いて起こったとしても、夢魔御殿に絡まるツタの葉の一枚だに揺るがさぬほど小さなものだったからだ。そして数ヶ月したところで、出版社から一通の手紙を受け取った。売れたのはわずか七部と知らせる旨のもので、差引勘定の方は何卒よしなに、という丁重な要求で結ばれていた。

スカイスロップは絶望しなかった。「七部」彼は考えた。「売れたのか。七とはまた神秘的な数、これは幸先が良いぞ。この七部を買ってくれた七人の人物を早速、探さねばなるまい。彼らこそ、もって僕が光明を投ずる「七つの金の燭台」『ヨハネ黙示録』第一章第十二節」としなければ。」

スカイスロップは、少しばかり職人の才を持ち合わせていたが、ロマンティックな構想は更にそれを発展させることになる。彼は小部屋や奥部屋、移動式の羽目板や秘密の通路などの模型を組み立てたが、それらはみな優れた技術を誇るパリ警察をもたじろがせたことであろう。父親の不在をいいことに、口のきけない大工をこっそり屋敷に忍び込ませると、自分の塔の中に、二人して模型のひとつを造り上げた。スカイスロップは、人類再生を導く偉大な指導者はおぞましい窮地に巻き込まれることだろう、と予見して、人類全体の利益を慮り、彼自身の身の安全のために可能な限りの予防措置を構じることに決めた。

使用人たちは、女たちに到るまで、沈黙を旨と仕込まれた。深い静寂が屋敷の中を、またその回りを覆った。ただ時折、ドアの閉まる時の音が長い反響となって廊下中に轟き、あるいは憂いに沈む執事の思い足音が、広間にうつろな反響を呼び起こすだけだった。スカイスロップは大審問官のように屋敷中をゆっくりと大股で歩き回り、使用人たちは宗教裁判所の捕吏〔使い魔〕のように彼の回りをせわしげに行き交った。夕方、テラスに面した崩れかけた塔のツタのもとでの瞑想の時、彼の耳元に届いたのは、ツタをサラサラといわせる風の音、翼のはえた聖歌隊員、梟たちの哀調に満ちた声、時折聞こえる屋敷の時計の音、そして低くならかな岸に打ち寄せる単調な波の音ばかりであった。とかくするうちにも、彼はマデライワインを飲み、人間性という狂った組織の徹底的修復を目的とする遠大な計画に思いを巡らすのであった。

第三章

グロウリー氏は訴訟に負けて、ロンドンから帰って来た。正義には味方されはしたものの、法律には敵対されたのだ。スカイスロップも悲劇的な気分浸っているのを見ると、夕暮には、この二人、墮落した時代の荒廃ぶりを嘆いては、互いに競うように、景気付けの杯を酌み交わし、時には、「墓や、蛆虫や、墓碑銘」〔リチャード二世〕第二幕第二場 第一四五行〕などの、気味の悪い冗談を飛ばし合ったりもした。当主の御帰還と時を同じくして、すでに第一章で紹介済みのグロウリー氏の友人たちが訪問した。同時にまた、スカイスロップの友人で大学の御学友の、リストレス〔ものうげ〕氏閣下のお着きとなった。グロウリー氏が、この社交界の若き寵児が、ロンドンで「拷問台とも言うべき、心地良すぎる安楽椅子に伸びて」〔ポープ、『ダンシアッド』第四書 第三四二行〕、憂鬱性厭世症の

「無為」にさいなまれてゐるのを発見し、田園の清新な空氣にふれて気を晴らすようと、夢魔御殿滞在を熱心に懇願したので、リストレス氏、断るよりも承諾するが易しとばかりに、フランス人の従者、フェトゥー「一切合財なんでもお世話いたします君」を呼びつけ、リンカンシャーに赴く旨告げた。この単純極まる指示を受けただけで、フェトゥーは仕事に取りかかる。旅行鞆は詰められて、リストレス氏閣下がこの件に関して一言半句も一顧だにも与えぬのに、急ぎの馬車が玄関の前につけられた。

ヒラリー氏夫妻も母無し子の姪を伴ってやって来た。アイルランド上官と駆け落ち結婚したグロウリー氏の末の妹君の娘である。この妹君の財産、一年後には消失した。愛は、当然の帰結として、二年目に消失。アイルランド人自身は、更なる当然の帰結として、三年目に失踪。グロウリー氏から年金を貰い、一人娘とひっそり暮らしていたのだが、先頃亡くなられるその際に、一人娘をヒラリー夫人の保護に委ねたのである。

マリオネッタ「繰り人形」・セレスティーナ・オーキャロル嬢は、咲き誇るばかりに美しい、洗練された若き乙女であった。オーキャロル家の「アレグロ・ヴィヴァーチェ」[活発なテンポ]とグロウリー家の「アンダンテ・ドロース」(悲痛なゆるやかさ)の混合体であったので、その性格のうつろいやすさは四月の空を思わせる。淡い褐色の髪。柔和ながらもキラキラと輝く光をたたえたハシバミ色の目。整った顔立ち。ふっくらとして形の良い唇。そして並はずれて優雅な肢体。音楽には堪能。会話は気が利いていたが、その話題は常に軽く、関心も限られていた。それもそのはず、およそ道徳的に他を慮る気持ちなど、彼女の心に占める場所などなかったのだから。この乙女、少々、あだっぽく、多分に、気紛れで、好きになったり嫌いになったりの大忙しであった。何であれ、手に入らぬと見える間は、一生懸命追い求めるが、ひとたび手中に収めるや、わざわざ所有するに値なしとうちやうてしまふ始末。

従兄弟のスカイスロップが「好み」で心動かされたのか、はたまた、単なる好奇心で、恋の情熱がスカイスロップ

のような「変わり者」にどんな効果を及ぼすかを見たかただけなのか、屋敷に来て三日もたたぬまに、彼の心を虜にしようと、持てるかぎりの美貌と才気、その魅惑を振りまいた。スカイスロップはたやすく陥落。エミリー・ジルエット嬢の面影はすでに、哲学の力と理性の行使のおかげで、十分に薄らいでいた。というのも、「時」という偉大な医師によって施される精神的癒しは、通例、こういった影響、あるいは他のどんなものであると、その影響に帰せられて、本当の影響、新しい恋人の出現は別扱いされるものだからである。スカイスロップは、ロマンティックな夢をいだき、美と知性の組み合わせについて、実際、多くの純粹「先取的認識」(ウィリアム・ドラモンド、『学究的疑問』(二八〇五)第二書 九章)を持つようになっていたものの、果してその二つ、従姉妹マリオネッタに、正しく具現されているものと、若干の不安を懐いていた。しかし、これら不安も何のその、ほどなく彼は狂わんばかりの恋に乱れた。若き乙女、はつきりそれを見ると、戦略を変え、以前に示した熱烈であどけない愛情に負けずとも劣らない冷淡なよそよしさを装った。スカイスロップ、この突然の変わり身に面食らう。しかし、彼女の足元に跪いて説明を求める代わりに、自分の塔に退き下がり、室内着に身を包み、例の空想の秘密裁判所の大審問官席に陣取ると、恐ろしいほど正式な手続きをふんでマリオネッタを召喚し、恐怖のどん底に突き落とした挙句に、己の正体おのれを現し、悔い改めた美しき乙女をひしと胸に抱くさまを夢想した。

彼がこのように物思いに耽っていた時、——秘密裁判所の恐ろしい大審問官がそのフードとマントを後ろにさっとはねあげ、彼女を慕う心寛き恋人としての正体を、美しき被告人に現そうとしたまさにちょうどその瞬間、書斎のドアが開き、本物のマリオネッタが登場したのである。

彼女が塔に赴いた動機は、彼女の態度の変化が引き起こすこととなった、スカイスロップの突然の恋の駆け引きからの脱落が前兆となって起こるであろうことについての、少しの後悔、少しの心配、少しの愛情、少しの恐れであっ

た。数回、ドアを軽く叩いたが、聞こえた様子もない、もちろん返事もなかった。遂に、おずおずと用心深くドアを開けると、何と、彼女が見たものは、古い櫥のテーブルの上に乗せた黒いベルベットの椅子の前に立ちはだかり、縞のキャラコの部屋着を脱ぎ、ナイト・キャップを振り捨てている最中のスカイスロップ。それはフランス人が、堂々とした姿勢と呼ぶものであった。

しばらくの間、二人ともそれぞれの場所で釘づけになる——乙女は驚愕に、紳士は混乱のうちに。最初に沈黙を破ったのはマリオネッタ。「一体全体」彼女は言った「スカイスロップさま、どうなさいました」

「まったく、何のためにって！」と言ってスカイスロップはテーブルから飛び下りた。「あなたのためなのです、マリオネッタ。あなたは僕の天国なのです——あなたに対するもの狂おしさが問題なのです。あなたに恋焦がれているというのに、マリオネッタ、あなたの冷酷さが僕を狂気へと駆り立てるのです」彼は彼女の足元に身を投げ出すと、彼女の手に入るようにキスをし、情熱的この上ないロマンスの言葉で、千の誓いの言葉をささやくように言った。

マリオネッタは、長い間、その恋人が、雄弁にその胸の内を余すところなく述べ、へとへとに疲れ果て、返事を求めてひと休みするまで黙って聞いていた。それからとても悪戯っぽい顔付をして言った。「聞きてえもんだ。ただし当り前の言葉でね『ヘンリ四世・第二部』第五幕三場 第九八―九行のフォルスタッフの台詞」この引用の軽率さ、またその言い方が、ロマンティックな恋する男のひどく興奮した情熱と、不調和に食い違ったため、スカイスロップ、パッと立ち上がると、こぶしを握り絞め、自分の額を打ち叩いた。若き乙女は恐れおののき、宥めるのが好都合と考えて、彼の手を自分の手にとると、もう片方の手を彼の肩の上に置き、愛敬たっぷり真剣に、彼の顔を見上げ、優しくこの上ない調子で言った。「何がお望みなのです、スカイスロップさま」

スカイスロップは、再び天にも昇る気持ちだった。「何が望みかですって。あなた以外に何をと言うんです、マリオ

ネット。あなたですよ。僕の研究仲間として、僕の思想の伴侶として、人類の解放という僕の偉大な計画の助手としてのあなたですよ。」

「残念ながら、わたしでは役不足ですわ。情けない助手にしかありませんもの。スカイスロップさま。わたしに何をしろとおっしゃるのです」

「ロザリアがカルロス『『恐るべき神秘』の作中人物』と一緒にしたようにしてほしいのです。神々しきマリオネット。互いに相手の腕の血管を切り開いて、腕の中でその血を混ぜ合わせ、愛の神聖な誓いとして飲むのです。それから二人は先験的な明知の幻を見、思想の翼に乗って純粹知性の領域へと飛翔するのですよ」

マリオネットは答えに窮した。彼女はロザリアほど丈夫な胃を持ち合わせてもおらず、またその提案を聞いて吐き気を覚えた。突然、彼女はスカイスロップから身を振りほどくと、ドアから飛び出し、あたふたと廊下を逃げていく。スカイスロップは「待っておくれ、待っておくれ、マリオネット——我が命、我が愛しき人」と叫びながら、彼女の後を追いかけて行き、たちまち逃げる彼女に追い迫ったとたん、縁起の悪い角の所、二つの廊下が端を接する場所、階段の天辺で、彼はツーバッド氏と、不意に体ごと激突し、二人は、一緒に階段の一番下まで、まるで二個の玉突きの球が一つのポケットに撞き落とされるように、転がり落ちてしまった。この隙間に若き乙女は逃げ出し、彼女の部屋に閉じ籠もったのである。一方、ツーバッド氏は、ゆっくりと起き上がり、膝や肩をさすりさすり言った。「いいかね、スカイスロップ、このちょっとした出来事は、悪魔の束の間の覇権を示す、数ある証拠の一つじゃないか。こともあるうに、この忌ま忌ましい階段の天辺で、時も場所も同じうして、不幸にも二人の人間の時間と空間が鉢合わせするなんて、悪魔の深謀遠慮とそれに合わせた悪の計略以外に何が考えられるというんだ」

「確かに、おっしゃるとおりです」とスカイスロップ。「まったくあなたの言われるとおり。ツーバッドさん。悪に

災いに不幸に混乱、「虚栄に心痛『傳道之書』第一章第一四節」に死に病、暗殺に戦争、貧困に疫病に飢餓、貪欲に利己心、怨恨に嫉妬に癩癩に悪意、期待はずれの博愛精神や信義のない友情に横恋慕——こういったすべてが、あたなの見解の正しさ、あなたの思想体系の真実であることを証明していますよ。この階段の下まで転ろげ落ちるという、この忌々ましい干渉は、将来の僕の人生に邪悪な影を落とすやもしれません」

「よくぞ言った、スカイスロップ」とツীবッド氏。「ことの重大性を見抜く君の眼識は鋭いぞ」

こう言って、彼はスカイスロップを抱き締めると、スカイスロップの方はやるせない足取りで晚餐に備えて正装するため、退き下がって行った。一方、ツীবッド氏、次のように何度も繰り返しながら、広間をゆっくりと大股に歩いて行った。「地と海と禍害なるかな。悪魔おのが時の暫時なるを知り、大なる憤志を懷きて汝等のもとに下りたればなり。」

（以下次号掲載予定）

あとがき

〔作者について〕

「ハックスレーの師ピーコックは、ひどい仕打ちを受けた。彼の形式が理解されなかったために、散文フィクションの発達史において、なんとなく向こう見ずの変者という地位を与えられてしまったのである。実際には、彼は自己の分野においては、ジェイン・オースティンに劣らない精妙かつ確実な芸術家だったのだ」と同時代から今日に到るまでマイナー作家として過少評価されてきた、この不遇の文人を擁護したのはノースロップ・フライであった。

文学史では、ロマンティズム周辺の詩人、あるいは詩人シェリーを取り巻く何人かの奇人連中、所謂「シェリー・サークル」の一員として、あるいは同時代の詩人たち、すなわち湖畔詩人、ワーズワス、コールリッジ、サウジー等を批判した『詩の四つの時代』という挑発的なエッセーの著者として知られる他にはあまり知られることもない（実際、この二十頁わづかの論文も、シェリーの反論がなければ、文学的にも無視されたのではないかと思われるほど、今日からうじて記憶されているに過ぎない）、このイギリスの小説家、詩人、そして東インド会社の役人は、近年、その特異な作風が、一部の熱狂的な愛読者の間ではかなり大きな興味をひいている。（『ナイトメア・アビー（夢魔御殿）』と『クロチェット・キャッスル（気紛れ城）』の二篇が、一九六九年、レイモンド・ライト編注によるペンギン叢書版、そして『ヘッドロング・ホール（がむしゃら館）』と『グリル・グレンジ（グリル農場）』のピーコックの最初と最後の小説二篇が、一九八七年、マイケル・バロンとマイケル・スレーター両氏の編注で『世界古典叢書』の一冊としてオックスフォードより出版され、廉価版で手軽に読めるようになったのは有り難い。）

トマス・ラヴ・ピーコックは、一七八五年十月十八日、ドーセットのウェイマスに生まれた。有名なキャプテン・ラヴを母方の祖父に持ち、ロンドンのガラス商人だった父サミュエルは三歳の時に亡くなったが、文学を愛した母セアラに育てられる。（ちなみに一八三三年の母の死後、彼の執筆の意欲が衰え、次の小説を書くまで二五年間の空白があったことから、この母子関係の重大さが推察されるところである。）学校教育は途中（十三歳になる前）までで、大卒に進まず、独学でフランス、イタリア、イギリス文学を読み耽った。その一方で、ギリシャ・ラテンの古典文学にも親しむ。特に、フランス語とイタリア語には堪能であったという。作品中に散見する古典語なども、その独学による習得の結果であろうが、古典語のみならず種々な文学伝統の引用と脚注の断片、諸言語の混淆など、その百科全書的知識蒐集本能、芸術的才能、博覧強記には圧倒されてしまう。

一八一九年、三十四歳の時、チャールズ・ラムの勤務している東インド会社に勤め、実務的手腕を備えたやり手らしく、一八三六年には（同時に採用された十二歳年長の）経済学者ジェームズ・ミルの要職を引き継ぎ、同社の重役、文書調査部長に就任、在職期間は二十年、一八五六年にまで及んだ。そしてその後任をジェームズの息子、経済学者・論理学者のジョン・スチュアート・ミルに譲ったのである。上司のジェームズを通して哲学者のベンサムとも友好的な交流があったようである。同僚のこのミル父子や前述のラムとはさしたる交流はなかったらしいが、それぞれの文学趣味やユーモアに相通じるものは見出せなかったわけであろうか。

一八六六年、一月三日、四人の子の父親は死去する。

ピーコックの人生で特筆すべきは、ロマン派の詩人たちとの交際である。とりわけシェリーとは一八一二年に知り合い（この時シェリー二十歳、ピーコックは二十七歳で七歳の年長）、その夭折までの十年間、親しく交わり、影響を及ぼし合った。晩年には、ピーコックはシェリーの回想記を表しているほどである。前述のピーコックの詩論『詩の四つの時代』（一八二〇）について言えば、その結論、すなわち詩の衰退頹廢の時期が近づいているという予言が契機となって、シェリーは、その論争本能をかき立てられ、『詩の弁護』（一八二二）を書いたのである。私生活でも、シェリーが最初の妻、魅力的だが何か物足りないハリエット・ウェストロックと、ゴドウィンの娘、彼と同等に知的なメアリー・ゴトウィンとの間で悩む時も、ピーコックは心を砕き、持ち前の事務能力を発揮した。『夢魔御殿』においても、塔に閉じ籠もり、世界の再生をもくろむ論文をしたためる主人公スカイスロップ、マリオネッタとステラとの二人の女に悩まされる主人公には、作者の親友シェリーの面影が漂う。もちろん、ピーコック自身の婚約破棄、すなわち、マリアンヌ・セント・デュ・クロワなる女性に求愛・婚約している一方で、別の女性、金持ちの後取りと思われるていた「シャーロット」なる女と駆け落ち騒ぎを起こす。が、豈はからんや、この女、文無しと判明し、借金が払え

ずに逮捕までされてしまう。結局、当のマリアンヌからは肘鉄を喰わされ、絶縁を言い渡されるとすぐに、一八三六年、また別の女性、牧師の娘ジェーン・グリフィッドに求婚、結婚するという彼自身の多彩な女性関係も反映されているには違いあるまい。

〔作品について〕

ピーコックの小説について、「それぞれ別個の意見を持つ人物たちが、どこか片田舎の金持ちの館に招き寄せられ、そのテーブルの周りに並んで各個人が意見をぶつけあうこと、沢山の人物が出てきてそれぞれの立場で勝手なことを言いあうことがそのまま「小説」になるというのがピーコックの一貫した書法」と高山宏氏は評言しているが、ピーコックの代表作は、いずれも標題にトボスを示す語を含み、それぞれの「館」、「僧院を受け継いだ邸宅」、「城」、「農場」など、どこか遠くの閉じた世界の中で、そこに集う、いずれ劣らぬ奇人、変人たちが、主人を中心に、談論風発、酒宴を楽しみながらの談話形式による諷刺小説であることには変わりはない。彼の小説には、中世のロマンスを扱ったものもあるが、これまた筋の運びが平板である。作品の魅力は、いわゆるプロットではなく、シーンを構成する劇的対話や、実在の人物の戯画化、あてこすりに溢れる諷刺精神にあるのである。

戯画化と言えば、彼の小説の多くは、十七世紀フランスに始まった“roman à clef”すなわち「鍵を持つ小説、実話小説」(novel with a key)のジャンルに属する小説と言えよう。この種の小説では、実在の著名な人物が架空の名で描かれており、わずかに偽装が凝らされているに過ぎないので、登場人物のモデルになった人物、「鍵」探しも読書の興味の一つとなりうる。イギリスでは、この種の小説として、バイロンとシェリーを登場人物のモデルとしたベンジャミン・ディズレーリの『ヴィニーシャ』(一八三七)、リー・ハントとW・S・ランドーをモデルとしたディケン

ズの『荒涼館』(一八五三)、そしてD・H・ロレンスとマリをモデルとしたオールダス・ハックスレーの『恋愛対位法』(一九二八)、T・ハーディとH・ウォルポールをモデルとしたサマーセット・モームの『お菓子と麦酒』(一九三〇)などが有名である。『夢魔御殿』では、上述のシェリーの他に、コールリッジがドイツの先験哲学かぶれのフロスキ―(フロスキ―とはピーコックが得意のギリジャ語をいじくって造った名前であって「闇の使徒」という意味を体現している人物)として、バイロンが自己演出を得意とするサイプラスとして戯画化されている。

実は、ピーコック自身も死後モデルにされた。ジョージ・メレディスの『エゴイスト』(一八七九)のミドルトン博士はピーコックを下敷きにしたものだというのが通説になっている。このメレディス、一八四九年に、ある若い未亡人(若いと言っても彼より七歳の年長で、しかも一人の子供まで付いていた)と最初の結婚をしたのだが、才気煥発型のこの婦人、メアリー・エレンは、実は、ピーコックの長女であった。夫婦円満の生活で、男子を一人もうけるまでに到ったが、やがてメアリーは、妻ある画家と駆け落ちしたのである。この画家とは、ラファエル前派の周辺に輝いた一群の星の一人、かの『チャタートン』で有名なヘンリー・ウォリスで、チャタートンの肖像が残っていないかったため、創作上、友人の若きメレディスがモデルを務め、その顔がそのまま用いられたのである。皮肉なことに小説家の妻は、二年後、この画家とイタリアに駆け落ちしたわけである。メアリーは、捨てられて戻るには戻ったが、夫とのよりは戻るはずもなく、一八六一年に離婚。かくしてメレディスの結婚生活も、破局に終わるわけだが、最初の妻がピーコックの娘であったこと、メレディスが一時ピーコック方に奇寓して金銭的援助を受けたこと、この大先輩に親しく接したことなどは、作家としての彼に大きな影響を与えることになったことは間違いない。

ジャンルと言っても、ピーコックはあまりに个性的な作家なので分類不可能といった処が実情であろう。実際、ピーコックの「小説」はジャンル論でよく話題になるのであるが、その作品は、家族・友人など親しい者が音楽や会

食の場に会して団欒の一時を過ごしているところを描く、所謂「カンヴァーセッション・ピース」、あるいは会話形式による風俗諷刺画、はたまた漱石の『猫』等を髣髴とさせる。その特有なジャンルの説明として前出のフライは、ギリシャの犬儒哲学者メニッポスが編み出した形式で、ラブレールを典型とする「メニッポスの諷刺」と称している。曰く。「メニッポスの諷刺は、人間そのものよりも、人間のさまざまな精神的態度を扱うものである。術学者、頑迷家、成り上がり者、山師、狂信者、あらゆる種類の貧欲で無能な専門家たち、メニッポスの諷刺はこういった人々の社会的行動ではなく、それとは区別された各自の我田引水の人生観を扱う。こうしてそれは、抽象的観念や理論を扱うことができるという点で告白と似ており、性格造型の点で小説とは異なる——すなわち自然主義というよりも様式的な性格描写を行い、また人間を観念の代表者として見るのである。」

ところで、『夢魔御殿』の銘辞^{モットー}として、ラブレールから「それでも拙者は、多くの心優しき詩人^{うたひよ}たちや雄弁な弁舌家たちの間にあつて、うんともすんとも言えない啞野郎と噂されるよりも、金言にある通り、白鳥に伍して鷺鳥もどきにぎゃあぎゃあびいびいと啼きわめく道を選んだ次第だ」（渡辺一夫訳）という言葉^{言葉}を借りてきているが、その背景には、『詩の四つの時代』で同時代の文学に対して攻撃や非難を向けるに到ったのと同じ動機、文壇における自分の不遇をかこつ作家の姿が窺える。しかし作品の中に、作者を弁済するような人物が登場するわけでもなければ、他の人物たちの劇的対話による、人生観、哲学的、政治的諸意見の甲論乙駁が剣呑な様子になることもないし、またプラトンの『饗宴』のように弁証法的結論を生み出すわけでもない。この知的主題や知的態度を扱う「メニッポスの諷刺」において、作者自身は、デタッチメントを持った傍観者で、人物たちに意見を列挙・並列させるのみで、別にどれか一つを持ち上げるわけでもないのだ。ピーコックの諷刺は仮借のない痛烈な諷刺ではなく気さくな諷刺、故に、後味の悪いものではなくなる。事実、『夢魔御殿』で戯画化され、笑いのめされた当のシェリーが、自分の書斎を「スカイスロッ

プの塔」と呼んでいたという逸話からも、そのことは察せられるだろう。またホラチウスの伝統をひく笑いの諷刺家ベン・ジョンソンと、ユエナリスの怒りの諷刺の系列に属するサミュエル・バトラーの両者を『夢魔御殿』の扉に置いているのもピーコックの諷刺精神の豊かさの現れであろう。

最後に、一八五〇年、バイロンの親友であったブロウトン卿の本邸でピーコックに出会ったサッカレーが、その手紙の中で「作家だった頃は、魅力的な抒情詩人、またホラティウス風の諷刺家だったが、今やインドや世界の他のことすべてについて博学な白髪頭の陽気な俗人、東インド会社の次官」と彼を評したこと、そして、ピーコックが晩年、ギリシャ語の堅苦しい研究の合い間の一時の憩いとして、新たにディケンズの小説を読んで大いに楽しんだことも付言しておかねばなるまい。

〔主題作品〕

小説 *Headlong Hall* (1815)

Melincourt (1817)

Nightmare Abbey (1818)

Calidore (Unfinished)

Maid Marian (1822)

The Misfortunes of Elphin (1829)

Crochet Castle (1831)

Gryll Grange (1860)

詩

The Monks of St. Mark (1804)

Palmyra, and Other Poems (1805)

The Genius of the Thames (1810)

The Philosophy of Melancholy: A Poem in Four Parts, with a Mythological Ode (1812)

Sir Hornbook (1813)

Sir Proteus: A Satirical Ballad (1814)

The Round Table; or, King Arthur's Feast (1816)

Phododaphne: or, The Thessalian Spell. A Poem (1818)

'Long Night Succeeds thy Little Day' (1826)

Paper Money Lyrics, and Other Poems (1837)

'Newark Abbey' (1842)

劇

Mirth in the Mountains (1812-13)

The Dilettanti (1812-13)

The Three Doctors (1812-13)

回想記

'Memoirs of Percy Bysshe Shelley' (1858)

'Memoirs' Part II (1860)

'Unpublshed Letters of Shelley' (1860)

'Shelley. Supplementary Notice' (1862)

随筆

'Essay on Fashionable Literature' (a fragment, 1818)

'The Four Ages of Poetry' (1820)

'French Comic Romances' (1835)

'The Epicier' (1836)

'Gastronomy and Civilization' (1851)

'Horae Dramaticae' (1858)

'The Last Day of Windsor Forest' (1862)

翻訳

Gli Ingannati, or the Deceived (1862)

Aelia Laelia Crispis (1862)

尚、この「あとがき」を書くにあたって以下の文献を参考にしたことを明記しておく。(発行順)

The Dictionary of National Biography (O. U. P. 1917)

ノースロップ・フライ、『批判の解剖』(一九五七)(法政大学出版局 一九八〇年)

岡地 嶺、『Thomas Love Peacock の詩論』、『英語英米文学』第十号(中央大学英米文学会 一九六九年 十二月)二二七頁

Wright, Raymond (ed.), *Thomas Love Peacock, Nightmare Abbey, Crochet Castle* (Penguin English Library, 1969)

朱牟田夏雄、『ピーコックのこと』、『学燈』第七一卷第三号(丸善 一九七四 三月)二二一―二五頁

高山 宏、『円卓のセシオティケー ピーコックの祝祭小説』、『アリス狩り』(青土社 一九八一年)

Baron, Michael & Michael Slater (ed.), *Thomas Love Peacock, Headlong Hall and Gryll Grange* (O. U. P.: The World's Classics, 1987)

〔訳者付記〕

翻訳にあたっては、Henry Cole, ed., *The Works of Thomas Love Peacock*, 3 vols. (London: Richard Bentley and Son, 1875), vol. I. を用い、随時、現在入手できる二、三の版その他を参考にした。

会のメンバーは、赤岩 隆（三重大学）、岩田託子（中京大学）、楚輪松人（金城学院大学）、梶 正行（中京大学）、渡辺美樹（愛知学泉大学）の五人である。月に一、二回程度の読書会を行い、当番の者は、自分の試訳を原稿にしてそのコピーを全員に配り、それを見ながら互いに議論を交わし、訂正すべきは訂正した。そして、そのように訂正を受けた原稿を清書し保存しておいたが、各人に文体と用語の相違があるため、それをある程度、加筆して統一する必要があるが生じ、その作業及び「あとがき」執筆は楚輪が引き受けた。従って、その責任は楚輪が負う。尚、本文中括弧が散見されるが、これは作家の引用・脚注好みや、また「気質（ヒューモア）」小説家のピーコックの場合、登場人物の名前は、性格を表示する等、意味を持つ命名法であることを理解していた。あくための結果であることをおことわりしておく。

何分、浅学の学徒の集まりであるから、思わぬ誤りを犯していることと思われるので、諸賢の御批判と御指導をお願いする次第である。

尚、フランス語は本学教養部教授伊藤進氏に、ギリシア語、ラテン語は、京都大学文学部哲学研究科基督教教学専攻博士課程久山道彦氏にお世話になりました。

また翻訳の掲載を許可して下さい下さった教養部論叢委員会委員および英語系列の方々にこの場を借りて感謝いたします。